

### 特集◆NDC90周年とNCR2018刊行を記念して



# 『日本目録規則2018年版』

## ─ つながりをもった目録へ*─* **渡邊降弘**

#### 1. はじめに

2018年12月に『日本目録規則2018年版』 (NCR 2018) の冊子体 $^{11}$ を刊行し、その後 PDF 版 $^{21}$ を公開することができました。『1987年版』 (NCR1987) から31年ぶりの大きな改訂です。長く間があいたうえに、「標目」の語がなくなってしまうなど、これまで以上に抜本的な変更となっています。

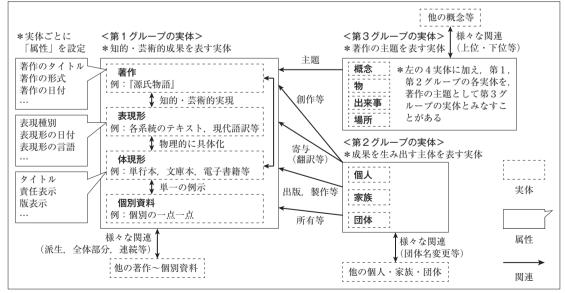
NCR2018が、1998年に国際図書館連盟(IFLA)から刊行されたFRBR(書誌レコードの機能要件)という概念モデルを基盤としており、AACR2(英米目録規則第2版)に代わるRDA(Resource Description and Access:2013)などの国際的な動向に歩調を合わせていることは、お聞き及びの方も多いと思います。多少勉強してみようとされた方もおられるでしょう。しかし、FRBRを読んでみてもNCR2018をのぞいてみても、変化が激しすぎて本質をつかみがたいというか、「読めば一つ一つの話は何となくわかるが、一口に言ってどうなるのかピンとこない…」と推量します。

さて今回、「前版との相違点や特徴」等をわかりやすく、との依頼を頂戴しました。しかし、これを与えられた紙幅で遺漏なく行うのは無理があります。そこで全体的説明は他稿に譲って30最小限にとどめ、本規則において最も本質的と筆者が考える点に焦点をあてて述べることとします。規則策定の責任者ではありますが、本稿の切り取り方は私見とご理解ください。キーワードは、「関連」と「機械可読性」です。

#### 2. NCR2018の概念モデル

図1は、NCR2018「第0章 総説」の冒頭近くに 掲載している「本規則が依拠する概念モデルの概 要」と同じものです。ごく一部を除くと、FRBR モデルの図としても通用します。

FRBRモデルは、これまで目録が扱ってきた「書誌的世界」を、「実体関連分析」を用いて概念モデル化したものです。点線四角で示した11の「実体」にそれぞれ、左端に一部例示されているような「属性」を設定しています。実体は、目録利用者の



▲図1 NCR2018が依拠する概念モデル(#0.3に掲載の図と基本的に同じ)

主要な関心対象を表す単位で、特に、目録の対象資料を表す「第1グループの実体」を、「著作」(知的・芸術的内容)、「表現形」(著作をテキスト等により表現したもの)、「体現形」(表現形を刊行物等の形で物理的に具体化したもの)、「個別資料」(個別の一点一点)と階層的に構造化して捉えた点が、FRBRモデルの特徴です。そして属性は、各実体の記述に必要なデータ項目を設定するもので、NCR2018ではRDAも参考に相当数の属性を設定しています。実体ごとに章を立てて、属性ごとに記録の範囲や方法を規定している「属性の記録」が、ページ数としてはかなりの割合を占めています。

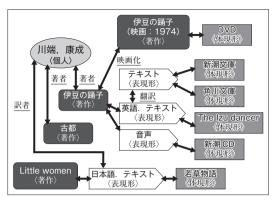
#### 3. NCR2018における「関連|

実体関連分析ではもう一つ,「関連」が重要な構成要素となります。関連とは,図1の実線矢印で示されている。実体と実体の間を結ぶ情報です。

第1グループの実体と第2・第3グループの実体との関連は、従来の著者標目、主題標目に相当し、つまり典拠コントロールを伴う標目付与作業は、ここに吸収されます。従来と異なるのは、第1グループが4実体に分割されているので、どの実体との関連かが明確になる点です。つまり、著者や作曲者は著作との、翻訳者などは表現形との関連を設定することとなります(主題を表す関連は、常に著作との間に設定します)。

さらに、第1グループの実体を階層的に四つ設定したため、これらの相互の関連も必要です。書誌データの根幹となるのはこれまでの「版」とほぼ同じ単位の体現形ですが、これがどの著作・表現形を具体化したものなのかを、関連として明示する必要があります。これは著作(と表現形)の典拠コントロールを行うということです。NCR1987の「統一タイトル」の延長線上にありますが、従来ごく限定的な運用にとどまってきたので、新たな挑戦となります。

以上は、11実体を相互に結びつける基本的な関連の設定ですが、これに加えて、同じ種類の実体間に存在するさまざまな関連もあります。例えば、「翻訳」は原書のテキストと翻訳テキストという二つの表現形間の関連ですし、「映画化」になると別著作として扱うので二つの著作間の関連となります。NCR1987ではこれらの情報には「注記に関する事項」を用いてきましたが、NCR2018では関連の記録として表現します。なお、NCR1987における書誌階層構造も、作成単位を異にする二つの体



▲図2 関連によるデータのつながり (新 NCR 検討集会の資料を修正)

現形間の関連と見なして表現することができます。 NCR2018では属性の記録に多くのページ数を割き,「第3部 関連」は比較的短いですが,その適切な記録は、きわめて重要です。図2は、川端康成(個人)と直接・間接につながる諸実体を模式的に表したものです。右側の「新潮文庫」以下の体現形群は、NCR1987でも書誌データ作成単位となってきたもので、著者標目を頼りにまとめて助出すことが可能ですが、それ以上の仕分けは困難でした。NCR2018では関連の記録により、構造化されたわかりやすい表示の可能性が広がります。なお、図では省略していますが、映画版「伊豆の踊子」や「Little woman」には川端以外に責任性をもつ個人等があり、関連のネットワークをさらに広げてたどることもできます。

NCR2018によって目録はどう変わるのか、何が目に見える利点なのか、はよくお尋ねを受けるところです。もちろん個々の実体(体現形や著作など)の属性を十分詳細に記録することではかられる性能向上等も考えられますが、一つに絞るとすれば、実体間の関連をきちんと管理することで、データ間のさまざまな「つながり」を生かした目録サービスが可能になるところだと考えています。NCR2018では属性と関連をともに「エレメント」として設定しており、実際のシステムでも明確には区別されないかもしれませんが、関連の記録をどこまで意識的に丁寧に行えるかが、大きな意味をもっています。

#### 4. 関連の表現と機械可読性

実体間の関連の記録は、ある実体(関連元の実体) の記述の一部として行われ、具体的に記録すべき は関連先の実体です。例えば著作「伊豆の踊子」

の記述において、関連のエレメント「創作者」に、 関連先が個人「川端康成」であることを記録しま す。

記録の方法はいくつかあり、 代表的なものが 「典拠形アクセス・ポイント」です。「川端、康成、 1899-1972 | のような、従来の「統一標目 | にあた るもので、NCR2018においては、各実体に対して 「優先名称」等を基礎とする典拠形アクセス・ポイ ントを構築することを定めています。著作につい ては、「野坂、昭如、火垂るの墓」のように、創作 者(著者等)の典拠形アクセス・ポイントと「優先 タイトル」を組み合わせた形を基本とします。

もう一つの方法として、「識別子」があります。 実体を一意に表す記号列で、国際的な標準番号や、 安定的に運用されているID(国立国会図書館典拠ID など) などです。これを用いて関連先の実体を示 すこともできます。

NCR2018では、さまざまな運用に柔軟に対応で きるよう. 他にもいくつかの方式を許容しており、 その中には従来の注記に近い形式(非構造記述)も あります。しかしそれは文章でないと表しがたい 複雑な場合のために用意しているもので、通常は 典拠形アクセス・ポイントや識別子によることが 推奨されます。それは、人間が読んで理解するの ではなく、システム(機械)に認識させるためで す。

現在、大学図書館等の多くのOPACでは、書誌 階層構造や逐次刊行物の変遷をリンクによって表 現しています。これはNACSIS-CATが関連先の レコードIDを格納する「リンク形成」の仕組みを とっているからで、著者等の典拠コントロール部 分も同様です。関連の「つながり」とは要するに リンクであり、リンク先へ画面を遷移させるため には機械可読性をもったデータ表現が必要です。

FRBR モデルに用いられた実体関連分析は、リ レーショナルデータベースの設計にもよく用いら れるものです。FRBRモデル自体は「概念モデル」 であり、実際のデータベース構築には直結しませ んが、機械可読性をもったデータを作りやすいモ デルといえます。機械可読性を備えたデータの構 築は今日の情報環境において、図書館における目 録サービスの進展のためにも、LOD (Linked Open Data) といった形で外部システムで活用され うるデータをめざすうえでも、たいへん重要です。 NCR2018では、FRBRモデルの採用に伴う特徴

のほか、RDAとの相互運用性を考慮した部分で も、機械可読性が重要な要素となっています。関 連の記録に関わる点をあげると、図2で下線を付 した「著者 | 「訳者 | 「映画化 | 「翻訳 | は. 「関連 指示子 | と呼ぶものです。それぞれ、著作 - 個人 等。表現形-個人等。著作-著作。表現形-表現 形の間の関連のエレメントに、その詳細な種類を 表すものとして、関連先の情報とともに記録され ます。資料上の表示の転記や自由記述ではなく. リストを示して一定の統制をはかっています。こ れが十全に記録されると、関連の種類に応じて何 らかの表示改善をはかることが可能かもしれませ ん。その他、属性の記録においても入力する値の 統制をはかるエレメントが一定数あるなど、機械 可読性はNCR2018の大きな特色と考えています。

#### 5. おわりに:これからの目録のために

NCR2018もRDAも、従来の規則と比べ柔軟性 が高く、実装にはさまざまな選択肢がありえます。 海外の OPAC 等で RDA による書誌データを参照 できますが、実はAACR2時代と比べ極端な隔た りはありません。NCR2018の実装方法はこれから 各機関で検討されていきます。日本では著作の取 り扱いが欧米以上に希薄だったことなどから、変 化はより大きくならざるをえない面がありますが. 規則の見た目の隔たりほどに、これまでと断絶し た形にはならないと思われます。

しかし、あるいはだからこそ、新たな規則の本 質をふまえての運用を望みたいと思います。許容 されているからといって、これまでと大して変わ らない考え方での運用では、やはりこれまでの目 録にしかなりません。

本稿では、大部・詳細なNCR2018を俯瞰して、 「関連」と「機械可読性」という 2 点のみをあえて 述べました。システムが自動処理できる形でデー タが相互につながりあうことが、NCR2018の最も 重要なところだと考えています。

- 1) 日本図書館協会目録委員会編『日本目録規則2018年版』日 本図書館協会, 2018.12. 761p.
- 2) http://www.jla.or.jp/mokuroku/ncr2018
- 3) 関係資料を以下のウェブページにまとめています。紙幅の 都合により、個々の参照注は省略します。

目録委員会「日本目録規則 (NCR) 2018年版関連情報」 http://www.jla.or.jp/mokuroku/ncr2018-info

(わたなべ たかひろ:

帝塚山学院大学, JLA 目録委員会委員長) [NDC10:014.32 BSH:資料目録法]